# 銭形平次捕物控

## 二階の娘

野村胡堂

青空文庫

# 一

「親分、變なことがあるんだが――」

ガラツ八の八五郎が、少し鼻の穴を脹らませて入つて來ました。

「よくそんなに變なことに出つ逢すんだね、俺なんか當り前のことで飽々してゐるよ。借りた金は返さなきやならないし、時分どきになれば腹は減るし、遊んでばかりゐると、女房は良い顏をしないし」

錢形の平次はさう言ひ乍ら、せつせと冬仕度の繕ひ物をしてゐる戀女房のお靜の方をチラリと見るのです。

まア――隨分、と言つた顏をお靜はあげましたが、また例の八五郎を遊ぶつもりの冗談と判ると、素知らぬ顏をして、縫物の針を動かしました。名殘りの虻が障子に鳴つて、赤蜻蛉の影が射しさうな緣側に、平次は無精らしく引つくり返つて、板敷の冷えをなつかしんでゐる或日の午後のことです。

「だが、こいつは變つてゐますよ親分」

「前觸れはそれくらゐにして、なんだいその變つてゐるのは」

八五郎の物々しい調子に釣られて、平次もツイ起き直りました。

「今朝、湯島の天神樣にお詣りをして、女坂の上から、ぼんやり下谷の方を眺めてゐると、ツイ二三十間先——家の數にして五六軒目の二階の縁側に出してある行燈（あんどん）が、戌刻半（いつゝはん）（九時）過ぎだといふのに明々と灯が入つてゐるぢやありませんか」

「消し忘れたんだらう」

ガラツ八の報告も、平次に註を入れさせると、何んの奇怪味もありません。

「ところが親分、念のために、ツイ今しがたもう一度行つて見ると、行燈の灯がまだ點いてゐるのはどうでせう」

「フーム」

「朝消し忘れた行燈が、油も注さずに申刻（なゝつ）（四時）近くまで點いてゐる道理はありません。變ぢやありませんか、親分」

「成程さう言へばその通りだが、——近頃なんか、そんな禁呪（まじなひ）が流行（はや）るのかも知れないよ。歸りにそれとはなしに、どんな人間が住んでゐる家か訊いて見るが宜い。如才もあるまいが、その家へ飛込んで訊いちや打ちこはしだよ」

「やつて見ませうか」

その話はそれつきり忘れて、ガラツ八が歸つたのは日が暮れさうになつてから。

翌る日。

「親分、どうも益々變ですよ」

八五郎のキナ臭い顔が飛込んだのはまだ朝のうちでした。

「晝行燈はなんの禁呪と解つたんだ」

平次も少しばかり眞面目になります。

「解らないから不思議なんで」

「それぢやなんにもならないぢやないか」

「ところが今朝は晝行燈が引込んで、赤い鼻緒の草履がブラ下がつてゐるんで」

「さあ解らねえ」

「昨日行燈の出てゐた二階に間違ひはありませんよ。鴨居から赤い扱帶で、女草履が片つ方ブラ下がつてゐるのは不思議ぢやありませんか」

「癲癇の禁呪にそんなのはなかつたかい」

平次の顔も少しキナ臭くなりました。

「癲癇なら草履を頭へ載つけるんですよ」

「愈々もつて解らねエ。——その家にどんな人間が住んでゐるんだ」

「取揚げ婆アのお早の家ですよ」

「あの間引をするとか言ふ、評判のよくない？」

「亭主の六助は中條流の女醫者の藥箱持をしたことがあるさうで、殺生なことを渡世にする鬼夫婦の家だから話になるぢやありませんか」

「フーム」

「近所で訊くと、二階には姪とか従妹とかいふ、少し氣の變な娘がゐるさうですよ」

「何んだ氣違ひか、――馬鹿にしちやいけねえ」

平次は煙草をポンと叩いて、天井を突き拔けるやうな大欠伸をしました。岡つ引根性を無駄に刺戟されて飛んだ緊張が馬鹿々々しかつた樣子です。

「でも、一と月ばかり前までお屋敷奉公をしてゐたさうで、そりや綺麗な娘だといふ評判ですぜ、親分」

「綺麗な娘と聽くと、無性に乘り出すからイヤになるよ。面が綺麗だつて、氣の變なのは止してくれ、附き合ひにくくて困るぜ」

「氣が變にしても、天神樣の境內へ見えるやうに、いろんな物を持ち出すのは變ぢやありませんか」

「そんなに氣が揉めるなら、もう少し見張つてやるがいゝ。行燈と草履ぢや判じ物にもならねエ」

平次も何にか知ら疑念が殘らないでもない樣子です。

## 二

「親分、ちよいと來て下さい。いよ〳〵變なことになつたんだが、あつしぢや見當が付きません」

三日目の朝、八五郎が飛込んで來ると、いきなり平次を引立てさうにするのです。

「到頭來やがつたか、今日あたりはお前の大變が飛込みさうな陽氣だと思つたよ。いよ〳〵その娘が笹つ葉かなんか擔いで、二階縁側の花道へせり出したのかい」

平次は少しばかり面白さうでした。

「それならこゝへ來る前に、飛び込んで相方を勤めますよ」

「ハツハツハツ、そいつはよかつた」

「天神樣の女坂の上から小手を翳して遙かに眺めると、今朝は何があつたと思ひます？　親分」

「解らねエよ、八卦の方はまだ修業中だ」

「二階の障子にブラ下げたのは、麻糸と、細い紐と、髭の三品だ」

「苧と橙と笠と柿を賣物にして、『親代々瘡つかき』と呼んだといふのは小噺にあるが、それとは少し違ふやうだな、八」

「ちよいと行つて見て下さいよ。何にか恐ろしい事の前兆のやうな氣がしてならないんだが――」

「よし〳〵、お前がそんなに心配するなら、少々氣が變でも、綺麗な新造のために何んか役に立つてやらう、――尤も、三日とも續けて同じ物を出しや氣狂ひの仕業だが、三日とも違つた

物を出してゐるのは少しをかしい」

「でせう、親分」

「氣狂ひなら同じことをくり返す筈だ」

平次は湯島への道を辿り乍ら、斯く本氣になつたらしい調子で、かう八五郎に話して聽かせるのでした。

女坂の上に立つと、今日はまた滅法美しい秋晴れで、江戸の街は深川の端までも見えさうです。お詣りやら行樂やら忙しい人達はツイ眼の下二三十間先の二階縁側に仕掛けた、不思議な判じ物を讀まうともしません。

尤も、その隣の家の二階には澁柿を、その向うの家の二階には土用干ほど女物を干してゐる中ですから、髷や細紐を障子の外へ掛けたところで、前々からの關係を知らない人達には、何んのことやら解らなかつたのも無理のないことでした。

「ね、親分。あれですよ」

八五郎の指さすまでもなく、平次は不思議な二階のあたりを凝つと見詰めてをりました。

「一番上、右の方にブラ下げたのは苧だよ。その次は紐だが輪にして端つこを結んであるぢやないか。その下は髷だ。これを續けて讀んでご覽」

「苧、紐、髷ですか親分」

「それぢや、文句にも地口にもならない」

「麻絲、細紐、毛――と」
「駄目々々」
二人は玉垣に寄つたまゝ、暫く無駄を言つて居りました。
「親分」
「何んだ、八」
「妙に仔細がありさうで氣を揉ませるぢやありませんか。いきなりあの家へ當つて見ませうか、十手を見せて締め上げれば、わけはありませんよ」
「待ちなよ八、それぢや、あんまり智慧がなさ過ぎる、――上の絲は苧や橙の術でおと讀ませるに決つてゐる。その次は紐に相違ないが、輪にして端つこを結んであるから襷さ。襷の下を隱して髷をブラ下げたのは、待つてくれ八」
「親分」
「こいつは、おたすきけと讀めるぜ、たすきの下の方が毛で隱れてゐるから、おたすけだ」
「えツ」
「こんな手數のかゝる謎々が、白痴や氣違ひの智慧で拵へられるものか。來いツ八」
「親分」
八五郎はもう尻を端折つて、二三十里カツ飛ばすほどの勢ひです。が、お早の家は、女坂を降りるともう直きでした。

「御免よ」
平次はいきなり格子を開けると、
「ハ、ハイ、どなた様で？」
お早は少しまご〳〵して居ります。
「平次だよ。六助はゐるのか」
「ヘエ、あの、どんな御用でせう」
御法の裏を潜るお早は、高名な御用聞の顔を見ると、何んとはなしにギヨツとした様子です。
「二階をちよいと見せて貰はうか」
平次は立ち塞がるお早を拂ひ退けるやうに突き上りました。
「あれツ錢形の親分」
上の方を向いて大きな聲を出すのは、力及ばずと見て、二階に合圖を送るつもりでせう。
「えい、靜かにせい」
平次はトントントンと一氣に二階へ、唐紙をパツと開けると、中は思ひきや空つぽ——
「おや？」
「親分、鴨は締めましたぜ」
裏口へ廻して置いたガラツ八が下から大きな聲を出すのです。
「そいつを逃すな」

裏口へ飛んで行つて見ると、ガラツ八は中老人の六助を膝の下に敷いて正に『捕つた』の大見得をきつてゐるのです。

## 三

「もう一人はどうした」
「ヘエ――」
「娘の方はどうしたよ、八」
「知りませんよ。屋根から雨樋(あまどひ)を傳はつて降りて來たのは、この野郎だけで」
「馬鹿だなア、そんな爺はどうでもよかつたんだ。行燈と草履と髷(かもじ)を出した娘に用事があるのだ」
「ヘエ――」
「ヘエぢやないよ」
平次が腹を立てたところで、それは八五郎の手落ちでも何んでもなかつたのです。
「親分、先刻合圖をしてゐたんだから、どこかにゐるに違ひありません。この野郎を締めて見ませう」
八五郎の言ふのが尤(もつと)もでした。日頃そんなことをあまり好きでない平次も、十手と捕繩と、

脅し文句で埒を明ける外はなかつたのです。

「やい、先刻まで二階に居た娘は何處へやつた。いづれ締めるか沈めるか、賣り飛ばすかしたんだらう。眞つ直ぐに申上げなきや、しよつ引いて石を抱かせるぞ」

そんな時、ガラツ八の八五郎はなか〳〵結構な選手でした。平次は默つて成行を眺めてゐさへすればよかつたのです。

「言ひますよ、私共は惡いことをした覺えはございません。逃げ出したのは、あわてたせゐで身に覺えのあるためぢやございません」

六助とお早は觀念して皆んな喋舌つて了ひました。

それによると、今朝まで二階にゐた娘は名をお組といふだけ、あとは何んにも判りません。年は十八――どうかしたら九くらゐ、身扮や言葉の樣子では武家奉公をしてゐたらしく、滅法美しいところを見ると、いづれ御法度の不義でも働いて、人知れずこゝへ預けられたのでせう。懷胎の樣子はなかつたが、取逆上て少し氣が變になつたらしく、晝でも行燈を點けて置いたり、草履を緣側へブラ下げたり、無暗に逃出さうとしたり、隨分閉口した――と大した挨事らしくもなくいふのです。

娘の身許は一向解りませんが、一と月ばかり前――先月の十三日の晩六助と懇意にしてゐた渡り中間の源次といふ惡黨がゝつた男が『わけを訊かずに、默つて預つてくれ。長くて二た月短くば半月、食扶持は月に三兩、逃がさずに置いてくれたら後でお禮に五兩出す』といふ約束

で娘を預けて、それつきり姿を見せなかつたが、今朝不意にやつて來て、『娘は外へ合圖をしてゐる樣子だから、この上預けて置くわけには行かねエ、今直ぐ伴れて歸る』と言ひ出し、月極めの三兩とお禮の五兩を綺麗に拂つた上、駕籠に乘せて、どこかへつれて行つて了つた——と言ふのです。

「その通りでございます。これがお禮に貰つた八兩で、嘘も僞りも御座いません」

女房のお早までが口を添へて、懷から八兩の小判を出して見せるのでした。

「それぢやもう一つ訊くが、源次は今どこに居るんだ」

平次は調子を變へました。

「それがわかりません」

「隱しちやためにならないよ。お組を預つた科は知らなかつた分にしてやる術もあるが、それも、お前の出やうひとつだ」

「この間まで元町の本野伊織樣御屋敷に勤めて居りましたが、今はどこにゐるか一向にわかりません」

六助もお早も本當に知つてゐない樣子です。

「ところで、お組といふ娘が、親許のことでも話したことがあるのかい」

平次は違つた方へ話題を持つて行きました。

「いえ、何んにも、——聽きも、話しもしません」

氣違ひ扱ひにして、娘一人を二階に押し込め、物を言はせずに一ヶ月睨み通した六助夫婦の安惡黨振りの小意地の惡さ――

「ひどいことをしやがる」

平次もさすがに胸の惡くなる心持です。念のためもう一度二階に上がつて、娘の住んだ後を見ましたが、手拭一と筋殘つてはゐません。

「お組はこゝへ來るとき、何か荷物らしいものを持つて來たのかえ」

「いえ、本當に身一つで、手拭から櫛まで貸しました」

「お小遣は？」

「巾着も紙入も持つてゐなかつたやうです。お勝手口から直ぐ來た樣子で、素足に水下駄を突つかけて源次に追つたてられて來ましたが――」

六助夫婦の説明で、お組がこゝへ來たのは自分の意志ではないこともよく解ります。

「親分、書いたものがありますよ」

ガラツ八は鼻紙に消炭で書いたのを押入の隅から拾ひました。

「どれ～」

皺を延ばして見ると、覺束ない假名文字で、

もとお屋敷に奉公してゐた源次といふ男がお勝手口へ來て、三河島の母親がツイそこまで來て内證で一寸逢ひたいと言つてゐるからとおびき出し、弓町から湯島までつれて來て、この

家へ押込んでしまつた。なんのためにこの様な目に逢はされるのか少しも判らないが、二人で見張つてゐるから逃げ出す工夫はない。この手紙を拾つた方は、どうぞ――

そこまで書いて鼻紙は盡きて居ります。多分こんな手紙を書いたものの、親許へ屆ける工夫がなくて、その儘諦めて了つたのでせう。

## 四

平次と八五郎は何にか追つ立てられるやうな心持でした。お組とやらいふ娘一人の命ではなく、その奥にもつと〳〵複雑な犯罪が潜んで今ブスブス燻つてゐる様な氣がしてならなかつたのです。

元町の本野伊織屋敷へ行つて見ましたが、中間の源次は不都合のことがあつて、二た月ほど前に暇を出したといふだけ、奉公人にも家族にも何んの變りもありません。

源次の宿元を確めると、やはり今どこにゐるか解らないといふだけ、多分諸方の部屋を廻つて勝負事に浮身を窶してゐるだらうと言ふのが結論です。

「親分、大變なことになりましたぜ」

八五郎がぼんやりやつて來たのはそれから二日目でした。

「どうした八、いつもの大變と大變が違ふぢやないか」

「だつて、源次が殺されましたよ」
「何んだと」
「谷中で眞つ二つ。腕の冴えたところを見ると、多分辻斬でせうよ」
「懷中物は」
「綺麗に拔かれましたよ」
「それぢや辻斬ぢやない」
その頃はまだ、斬つた上に懷中物まで拔くやうなサモしい辻斬はなかつたのです。
「追剝にしちや腕が良過ぎましたよ」
ガラツ八はまだ腑に落ちない樣子です。
「待て〳〵、斬つて懷中物を拔いたのは、金ではなく證據になる品物を奪つたのかも知れない。こいつは面白くなつたぞ、八。お前は御苦勞だが、下つ引を二三人狩り集めて、源次の身許と今までの奉公先を皆んな洗つてくれ。とりわけ、綺麗な小間使か腰元が家出をしたところがあつたら、そいつを念入りに調べるんだ。お弓町のあたりが一番臭いぞ、解つたか、八」
「合點ツ、半日經たないうちに、お組の奉公先のお櫃に殘つた飯粒の數まで調べて來ますよ」
「頼むよ八」
「それから先は親分の働きだ、今のうちに一と休みしてゐなさるがいゝ」
疾風の如く飛んで行く八五郎、その忠實な後ろ姿を見送つてどうして今まで手を拔いてゐた

か、平次は自分乍ら歯痒(はがゆ)い心持でした。尤もお屋敷方の女中が一人、取揚げ婆アの家の二階から消えたところで、平次が手一杯に働く張合ひもなかつたのでせう。

「親分、判つた」

八五郎が歸つて來たのは、その日も暮れてからでした。

「どこだ八」

平次もツイ、落着かない心持で待ち構へてゐたのです。

「お弓町の旗本、千三百五十石取の庄司右京樣屋敷。源次はそこに三年も奉公して、この春暇を取りましたよ」

「その屋敷で女中がゐなくなつたのか」

「聽いて下さいよ親分、――そのお屋敷の御當主庄司右京樣は二年前から輕い中氣でお役御免になり引籠り中大變なことが始まつた」

「――」

「惣領(そうりやう)の林太郎樣、二十三になる良い息子だが、ブラブラ病ひでお引籠りと言ふのは世間體の表向きで、その實、お腰元のお組といふ十九になる綺麗なのと丁度一と月前の先月の十三日の晩に手に手を取つて夜逃げをして了つた」

「そのお組がお早のところに押込められたのも先月の十三日の晩だ」

「だから變ぢやありませんか」

「水下駄を穿いて、握りつ拳で道行をする女があるものか――まアいゝ、それからどうした、中休みをせずに話して了へ」

「若様の林太郎様は、同族石崎平馬の二番目娘、――これはお組へ輪をかけたほどの綺麗な天人娘お禮殿と祝言することになつてゐた。だから腰元風情と夜逃げをする筈はない――とこいつは庄司の屋敷中のヒソヒソ話だ」

「フーム」

話は大分こんがらかりました。

「林太郎様は許嫁のお禮にすつかり夢中で、祝言の日を樂しみにしてゐたと言ひますぜ」

「――」

「腰元のお組も綺麗な娘だが、育ちの良いせゐか堅い一方で、おまけに林太郎様は、名題の堅造と來てゐるから、二人は冗談口一つきいたこともない。手に手を取つて夜逃げなどは以ての外――とこれは御近所や屋敷の奉公人達の噂だ」

「フーム」

「親御の庄司右京殿は、中風で身動きも覺束ないが、恐ろしく氣が確かな上、弓町きつての一徹者だ。病氣の父親を見捨てて奉公人と夜逃げをするやうな伜に用事はない、久離切つて勘當の上、甥の助十郎を入れて跡取にし、明後日は親類中を呼んでその披露をした上、翌る日は直ぐ公儀の御屆を濟ませ、石崎平馬が承知なら、娘のお禮をそのまゝ嫁にして、助十郎と娶合せ

ると言ひ出した」

「その通り運んでゐるのか、八」

「あつしのせゐぢやありませんよ親分、そんな怖い眼をしたつて」

「一緒に逃げた筈のお組は、取揚げ婆アのお早の家の二階に一と月も押し込められ、可哀想にあんな手紙を書いたり一生懸命の合圖を工夫して援(たす)けを呼んでゐたぢやないか。若様の林太郎だつてどこでどんな眼に逢つてるか判つたものか」

「そこですよ、親分」

「源次が殺される迄は、どうかしたら眞物の駈落かと思つたが、お前の話を聽いてゐるうちに、俺にはどうも恐ろしい惡企(わるだく)みの匂ひがして來たよ。惡事を知つた源次を殺して口を一つ封じたのは仕事の山が見えたからだらう」

「――」

「お組は源次の細工や思ひ付きで隱したのでないことは、渡り中間の勝負事好きな源次が、お早夫婦へ仕送りから禮金までキチンと拂つたことでも判つてゐる。林太郎樣がお組を隱させたのなら一と月も逢はずにゐる筈はないし、これは矢張り黒頭巾を冠(かぶ)つたのが筋を引いて、若様とお組を別々に隱させ、頑固(がんこ)一徹な父親をけしかけて自分達に都合の好い跡目を拵へ、萬事形付いた上で、若様とお組を殺す心算(つもり)に違ひあるまい。あんまり早まつて殺すと、萬一跡取りが出來ないために、庄司家が取潰しになつちや元も子もなくなるから、跡取が決つて安心となる

までは、お組は兎に角若様を殺す氣づかひはない――」

平次はこゝまで推理を辿ると、この後の方針が次第にはつきり立つて來るのでした。

「親分」

ガラツ八は獲物の匂ひを嗅いだ獵犬のやうにいきり立ちました。

## 五

「お屋敷に、御奉公してゐた源次といふ男が昨夜谷中で殺されました。別段お掛り合ひがあるわけでは御座いませんが、念のためお届け申します」

平次はこんな口實で庄司右京の用人、堀周吉に逢つて見たのでした。

「あゝ左樣か、それは御苦勞なことで」

堀周吉は思つたより丁寧に迎へて、面倒臭がりもせずに挨拶をします。年の頃四十五六、骨と皮ばかりの華奢な男ですが、算數が長けてゐるのと、恐ろしく忠實なので、庄司家はお蔭で内福だといはれてをります。

「ところで、殺されて見ると折助でも中間でも下手人を捜さないわけには參りません。町方の者がお邸方に御迷惑を掛けちや恐れ入りますが、一つ二つお話を願ひたいことが御座いますが――」

「構はないとも、何んなりと訊くがいゝ」

平次の恐れ入つた様を氣の毒さうに、堀周吉は恐ろしく手輕です。

「源次はお屋敷に奉公中、何にか惡いことをしませんでしたでせうか」

「あまり良い人間ではないが三年間先づ無事に勤めた方だらうよ。尤も少しばかり給料の前借は踏み倒して出たが、外に惡いといふほどのことはなかつたやうだ」

何にか豫想外なことを平次は聽かされるやうな心持です。

「誰か源次を怨んでゐる者はなかつたでせうか、朋輩とか奉公人仲間とか――」

「一向氣が付かないな。尤も勝負事が三度の飯より好きだつたから、諸方の部屋で不義理もし、怨みも買つたかも知れぬが――」

堀周吉の話はこんな程度で、一向取止めもありません。

「それから、――これはお伺ひしていゝか惡いか判りませんが、お屋敷の若樣、林太郎樣は、唯今何方にいらつしやるでせう」

平次の唐突な問ひに、堀周吉はギヨツとした樣子ですが、

「それは知らない――知つてゐるなら苦勞はしないよ。まア、そんなことは訊いてくれるな」

打ち萎れてかう言はれると、押して訊く勢ひもなくなります。

平次は他にもいろ〳〵のことを訊いて見ましたが、堀周吉は老巧な用人らしく口を緘んで、それ以上は何んにも話してくれません。

歸り際に奉公人に逢つて、それとはなしに捜りを入れると、いよ〳〵明日の親類方の寄合ひで、甥の助十郎を家督に決め、林太郎の許嫁のお禮を改めて助十郎の嫁として内祝言をさせ、明後日は公儀の御届を濟ませて、庄司右京は隱居、助十郎は改めて將軍家へ御目見得といふ段取になりさうです。

平次はその足で元町の石崎平馬の屋敷へやつて行きました。これは庄司右京の一族と言つても、祿高はたつた百二十石、お禮の美くしさと、林太郎の執心がなかつたら、この祝言はモノになりさうもなかつたでせう。

平次は辭を盡して一生懸命頼みましたが、主人石崎平馬は所用と言つて、逢つてもくれません。奉公人達にそつと訊くと、庄司家の若様林太郎が行方知れずになつた時は、主人平馬もお嬢さんのお禮も、さすがに驚いた様子でしたが、親類達の口入と、庄司右京の望みで、養子助十郎へそのまゝお禮を嫁にと懇望されると、一議に及ばず、渡りに舟で應じ、それつきり林太郎のことは忘れて了つて、行方を捜す様子もないことが判りました。

家と家との縁組以外、この人達は何んにも考へてゐなかつたのでせう。林太郎が執心した美しいお禮も、結局は千三百五十石に嫁入する氣持しかなかつたのかと思ふと、平次も何にかうら淋しい心持になります。

「親分、どうでした」

門の外に、八五郎は立て續けに欠伸ばかりして待つてゐました。

「呆れて物が言へないよ、この上は今日中に、――遅くとも明日の夕方までに林太郎様を捜し出すんだ」

「お組は？　親分」

「それほど娘の方が氣になるなら、お前は三河島のお組の親許へ行つてくれ。俺は養子の助十郎と、庄司一家の者の出入りをもう少し突き止めて見る」

「それぢや親分」

「晩に逢はう」

錢形平次は斯うして、飛んでもない武家のお家騒動の渦中に飛込んで了つたのです。

源次が谷中で殺された晩の助十郎、平馬、周吉などの動きを調べるつもりでしたが、これは平次の大縮尻でした。武家屋敷の奉公人は口が堅い上、實際庭口から裏門へそつと出入りするなどは、お勝手元の住人達が知つてゐる筈もなかつたのです。

彼方此方無駄足をして、がつかりして歸らうとすると、

「親分、――錢形の親分さん」

後ろからそつと呼止める者があります。妻戀坂の淋しい道には、四方に聽いてゐる人もありません。

「お前さんは？」

「庄司様の庭男でございます。友吉と申しますんで」

六十近い大きな老爺ですが、頑丈さうな腰を二つに折つて、ひどく物に脅えてゐる様子です。

「友吉と言ひなさるのかい、用事は？」

平次は期待に息を呑みます。

「私がこんなことを申上げると、後の祟りが怖しう御座いますが、あんまりなことで、見るに見兼ねました」

「話してくれ、皆んな御主人のためになることだから」

平次は友吉を促し乍ら、妻戀稲荷の前に蹲みました。

「若様がお組と夜逃げをしたなんて、あれは大嘘でございます。お組は源次の野郎が誘ひ出しましたが、若様は、お氣の毒なことに――」

「林太郎様はどうした」

「その晩一合召上つてお休みになると、それきり翌る朝はお姿が御座いません。多分お酒に毒でも入つてゐたことで御座いませう。足腰の立たぬやうにして、夜中に運び出されたに違ひないと、私は一人で呑込んで居ります」

「どうして、さう呑込んだのだ」

「その晩、裏門へ駕籠が一挺着きました。町内の本道（内科醫）、北村道作様の駕籠で御座います。駕籠は何にか積んで行つたやうですが、間もなく道作様は歩いて歸りました」

友吉の言ふことは、なか〳〵含蓄があります。

「よし〳〵、それでよく解つた。眞夜中に江戸の町を平氣で飛ばせるのは醫者の駕籠くらゐのものだ、――それだけ聽けば見當はつく。ところで爺さん、これからどこへ歸るんだ――」

「弓町の屋敷へ戻りますが――」

「氣を付けるがいゝぜ」

「ヘエ――、では親分、若樣をお願ひ申します」

友吉は平次に別れて淋しい道を辿りました。ほんの二三十間も行つた頃、

「え――ツ」

橫合から飛出しざま、眞二つになれと斬りかけた者がありますが、その太刀先は僅かに外れました。

襲撃の寸前、聞髮を容れず、鐚錢が一枚飛んで來て、曲者の鬢のあたりを強かに打つたのです。

流るゝ刃を取直す間もなく、第二第三の錢は流星の如く飛んで拳へ、額へ、そして第四の錢は危なく眼の玉を打たうとしたのです。

曲者は一散に逃げ失せました。

「爺さん、危なかつたな――庄司の屋敷へ歸るのは締めて、當分俺の家へ來てゐるがいゝ」

平次は大地へヘタ〳〵崩折れる友吉を援け起しました。

# 六

三河島のお組の親許を訪ねて歸つた八五郎から聽くと、お組はそこへも歸らず、正直さうな兩親は娘が行方不明と聞いて、庄司家へ行つて劍突くを喰はされ、どうしやうもない不安な日を送つてゐるのでした。

「この上は醫者の北村道作の方を手繰るの外はあるまいよ」

平次は休む隙もなく八五郎と一緒に弓町まで出かけました。

本道の北村道作は、界隈に古く住んだ醫者で、惡事に加擔しさうもありませんが、兎に角充分に用心をして、十手に物を言はせて眞つ向から脅かすと、

「私は何んにも知らない。あの晩急病人があるからと庄司家の使で行つて見ると、急病人といふのは嘘で、一刻ばかり用人と碁を打たせられて、いざ歸らうと思ふと駕籠がない。仕方がないから歩いて歸つたが、後で若い者から聽くと、何んでも病人らしい者を私の駕籠に積んで、無理に巢鴨の庚申塚まで運んだといふことだ。行先は若い者が知つてゐるだらう、私は何んにも知らない」

と言つたやうなたよりない話です、どうかしたら、薄々事情を知つてゐても、うんと脅かされて物を言へなかつたのかも知れません。

出入りの駕籠屋の若い者に逢つて、その晩の行先を確かめ、庚申塚の近所で、植辰の寮を聽くと、すぐ解りました。が踏込んで見るとそこは空つぽ——。

夜中乍ら、近所を叩き起して訊くと、何んでも一と月前ほど前に、氣の變な武家を出養生に連れ込んだが、若くて丈夫で暴れやうがひどく、近所へ聽えも惡いので、間もなくどこかへ移して了つたといふことが判りました。

駒込まで引返して植辰の本家を叩き起して訊くと、近所の言ふ通り、庄司家から頼まれて氣の觸れた若い武家を巢鴨の寮に預かつたが、若い丈夫な男が二人附いてゐても持て餘して、到頭橋場へ運んで行つたといふのです。

行先は橋場の船頭の文七といふ男の家——。

平次と八五郎が橋場へ着いたのは、もう夜が明けて翌る日になつてからでした。

「今日一日の辛抱だよ、八。今日中に搜し出さなきや、明日は林太郎とお組の死骸が、心中した體でどこかに投り出されるに決つてゐる」

平次は馬道で朝歸りの客のために開いてゐる飯屋に飛込み、そゝくさと腹を拵へ乍ら、八五郎を勵ましました。

「大丈夫ですよ、親分。自慢ぢやねエが、喰ふ物さへ喰はして置きや、もう二た晩三晩寢なくたつて驚きやしませんよ」

熱い味噌汁を啜り乍ら、八五郎は肩を聳やかします。この男の取柄は、全くこの忠實と、疲

れを知らぬ我武者羅だつたかも知れません。

　橋場の文七のところへ行くと、文七は留守。一と月も前から寄り付かないさうで、女房は大嫉妬で半病人になつてゐる有様です。

　何を訊いても噛み付きさうで、手掛りを引出すどころの沙汰ではなく、散々の體で引揚げてしまひました。

　尤も、近所で訊くと、大方の見當だけは付きました。がその話といふのがまた大變です。

　橋場の文七は、どこから持出したか、自分の船に大一番の早桶を積み、諸人を嫌がらせ乍ら、川筋を上へ下へとたつた一人で漕ぎ廻つてをりましたが、それもどうしたのか、七日ばかり前からふツつりと姿を見せなくなつたといふのです。

「早桶はひどいことをしやがる」

　その中に庄司の惣領林太郎を入れて、人目を誤魔化して日の經つのを待つたことは、疑ふべくもありません。二十三歳の強健で正氣な男を、命に別條のないやうに一と月も監禁して置くといふことは江戸の街中では容易のことではありませんが、早桶に押込んで船の中に据ゑ、關東の川筋を漕ぎ廻つてゐる分には隨分人眼を誤魔化せないこともなかつたでせう。

「ところで、文七の船は歸つてゐるのか」

「船は何時の間にか空つぽになつて、川岸ぷちに繋いでありますよ。だからお神さんが納まらないんで、――幸ひ鳥越のお百の家を知らないからいゝが、あの穴が解つた日には出刃庖丁騒

ぎだ」

近所の衆の暗示に富んだ言葉を手繰つて平次と八五郎は鳥越のお百の家といふのに行つて見ると、四十男の文七は、七日ぶツ通しに呑んで、性も他愛もなく醉ひつぶれてゐるのです。

お百を呼出して訊くと、文七は餘程金を持つてゐるらしいといふ。いづれ早桶を船に積んで十七八日も漕ぎ廻つたお禮でせう。この上は文七の口を開かせる外はありません。

水をブツ掛けて、どやし付け乍ら訊くと、

「——どこの侍だか知るものか。兎も角、二人で氣の違つた若い武家をつれて來て、ほんの二十日ばかり陸へ上げないやうにしてくれといふんで。お禮は一日一兩さ、外に無事に濟ませば褒美が五兩だ。ヘツ、ヘツ、二十五兩と稼いだのは惡くなかつたぜ、——最初は葛籠へ入れて船の中に飼つて置いたが、知合の船が五月蠅くて叶はねエ。それから大一番の早桶を買つて來て入れたのは大した智慧だらう。船番所の眼さへ除けて通れば、氣味を惡がつて、傍へ寄る船もねえのさ、——早桶の中身をどこへやつたといふのか。一日一兩になるから、もう十日も稼ぐつもりだつたが、七日ばかり前に二人の侍が來て、大分イキが惡くなつたから、伴れて歸つても大丈夫だらうつてやがつて、駕籠へ放り込んでどこともなく行つて了つたよ」

文七は平次と八五郎に責められて、漸くこれだけのことを言ひました。

「駕籠はどこのだ」

「この邊にウロウロしてゐる四つ手ぢやねえ。山の手の辻駕籠だよ、どこの駕籠か判るものか」

それ以上は何を聽いても判りません。

## 七

神田の家へ引揚げたのはもう晝頃、庄司家の親類會議が開かれるまで、あと三刻精々です。

「弱つたな八」

錢形平次も、さすがにこの時は悲鳴をあげました。

「親分、どうしたのでせう」

「お組と林太郎樣と一緒に、どこかに隱してあるに違げえねえ——が」

「すると、親類會議が濟んで庄司家の跡取が助十郎と決まれば、すぐ二人を殺して心中と觸れ込むわけですね」

「多分そんなことだらうと思ふ」

そこまでは考へられますが、さてそれ以上はどうにもなりません。

そのうちに次第に陽が傾いて、未刻（二時）になり申刻（四時）になります。平次は先刻から煙草ばかり立て續けに燻らして、煙の中から眼を光らせてをりますが、何んとしても結構な智慧は浮びさうもなかつたのです。

「武家のお家騷動なんかに足を踏込んだのが間違ひだつたな、八」

平次は到頭投げて了ひました。上野の暮酉刻（六時）が鳴ります。

「さう言つたつて親分」

已むに已まれぬ平次の正義感と、お組――謎々の合圖を工夫する娘の魅力に引かされた八五郎の好奇心が、こゝまで深入りさせて了つたのでした。

「一本つけませうか」

女房のお靜は、平次の機嫌をほぐす妙藥を心得てゐるのでした。

「さうしてくれ、八と爺さんと三人で、今晩は少し過すことにしようよ」

平次は大きく伸びをして雀色に暮れて行く秋の街を見やりました。

「お氣の毒なのは若樣でございます」

あれからズーツと平次のところにゐる友吉爺やは洟水と涙とを一緒になで上げます。

「諦めることだ、――俺は町方の岡つ引だから、武家方のことは手のつけやうがない。これが商人の家なら、踏込んで親類會議を延ばさせる手もあるが――」

「――」

妙に沈んだ心持を、お互にどうすることも出來ません。

「隱した場所は矢張り、屋敷の近くだな――」

平次は最初の猪口を嘗めて、腕を拱きました。

「まだそんなことを考へてゐるんですか親分」

「考へる氣もないが、――忘れないよ」
「無理もないが、忘れることにしませうよ、親分」
「だが、待つてくれ。ね爺さん、あの屋敷の中に、滅多に召仕の者の入らない藏か物置がなかつたかい」
平次の叡智は、活溌に動き始めたのです。
「ありますよ。小さい寶物藏で、奉公人は足も踏み入れませんが、この間から御用人の堀樣とそのお配偶のお瀧さんがちよく〳〵入るやうで――」
「それだよ」
平次は立ち上りました。
「親分、何がそれなんで？」
八五郎は手酌で二三杯續け樣に呷つてをります。
「でも、あの寶物藏へ若樣を隱したら、食物をどうして運んだのでせう」
と友吉。
「それで俺も迷つたんだ、死にも生きもしないやうにして置く分には、そんなに澤山の食物が要る筈はない、――もう迷ふことはないよ。お靜、食物を少し用意してくれ、輕いものがいゝ。七日もろくに食はずに居る人間に精のつく物がほしいんだ。さア、八、一緒に行くか」
「行かなくてどうするもんで親分」

八五郎は中腰になつて、徳利からラツパ呑をやつてをります。
「私も参りませう、何にかのお役に立つかも判りません」
爺やの友吉までが武者顫ひをして起ち上りました。

## 八

その晩庄司家の奥座敷に集つたのは、主人の庄司右京を始め、用人堀周吉、養子の助十郎、石崎平馬、その娘のお禮を始め近い親類からずつと七八人。燭臺を人數ほど並べて、秋の夜の薄冷えを火桶に凌ぎ乍ら、相談は次第に纏まりかけてをりました。
主人の庄司右京は何分輕い中風とは言つても口も不自由なので、用人の堀周吉が代つて辯じます。
「若様――林太郎様には、一ヶ月程前に召仕の組と逐電いたし、今以て在所が判らず、御主人様ことの外御立腹で御座います。私共家來一統、いろ〳〵とおなだめ申上げましたが、何んとしても御聽入れがなく、このこと萬一公儀御耳に入らば、庄司の家の瑕瑾とも相成ること、一日も早く林太郎様を勘當し、甥御様の助十郎を御家督に直し、御主人様には御隱居の上、ゆる〳〵と御養生遊ばしたいと強つての御望で御座います」
堀周吉は一座を見渡して、かう達辯に續けました。

「就ては、御親類様方御一統の思召を承はり、御異存がなければ明日にも公儀に届出の上、改めて世間へも披露いたしたいと存じます。それから、林太郎様御許嫁石崎平馬様御息女お禮様は、折角當家に御縁のあつたことでもあり、そのまゝ當家にお迎へ申上げ、御跡取助十郎様と祝言いたさせたいと存じます。皆様御異存が御座いませんか、――御言葉がなければ御同意下されたことといたし、右様に取極めて、別席にて一獻差上げたいと存じます」

堀周吉は言ひ納めて一座を見渡します。誰も異論を稱へる者もなく、――僅かに病人の主人、庄司右京の眼に、激しい忿怒らしいものが走りましたが、やがてそれも悲しい諦めとなつて、人々の笑ひさゞめく聲に紛れてしまひます。

「それでは、公儀御届のため、皆様の御判を頂戴いたします」

堀周吉が何やら書面を上座の方から廻し始めました。

「待つた」

不意に弱々しいが凛とした聲、――一座はしんとなりました。

「その御判、お待ち下され。庄司林太郎、それに參つて申し開き仕る」

「――」

あツと顔見合はせる一座の中へ、月代も髭も伸び放題乍ら清らかな紋服に着換へた林太郎は、細々とした自分の影を踏んで、――冥途を行く亡者のやうに靜かに進み出たのです。

「や、どこから、どうして」

驚く堀周吉、さすがに喰つてかゝりもなりません。林太郎はそれを尻目に、

「父上様、御心配を相かけ申譯も御座いません。林太郎は召仕などと逐電はいたしません。それなる堀周吉の奸計に陥り、唯今まで獣類に等しき扱ひを受けました」

父右京の前にピタリと坐つて、静かに一座を睥睨するのでした。

「お、お」

右京は口もきけませんが、嬉し涙が老の眼を溢れて、膝を濡らすばかり。

「何が證據、——飛んでもないことだ」

飛付きさうにする堀周吉は、縁側にひれ伏した錢形平次に止めを刺されました。

「證據は山程ある。植辰、文七、友吉、六助夫妻、皆んなお上の手に押へてあるぞ」

「お前は何者だ」

堀周吉は血眼になつて叱咤するのを、

「平次、父上も御承知だ。その惡者を縛つてくれ」

林太郎は指を擧げて指しました。

× × ×

平次が堀周吉その他の惡者を縛り上げる間に周吉に荷擔した親類達はコソコソと逃げ出しました。

嵐の後の凪ぎを見測らつて、林太郎と平次から、改めて父庄司右京と、殘る親類達にことの

經緯を説明して聽かせます。

「――そこで、もう一つ御願ひが御座います。お禮殿と許嫁の約束は私から申すまでもなく、最早破談になつたことと思ひます。お禮殿は助十郎殿が御引取下さるやう――私は召仕の組を改めて妻として迎へたいと存じます。組とは別々に誘拐され、何んの關りもないことは唯今まで申上げた通りで御座いますが、私が行方知れずになつて三十日も經たないうちに、助十郎殿と祝言をする氣になつたお禮殿とは、心構へが違つてゐるやうに存じます。御親類方のどなたかに、組の親元をお願ひしたいと存じます」

肉體的に弱り抜いてゐても、氣丈者らしい林太郎のハキハキした言葉を聽いて、頑固一徹とふれ込んだ父親右京が合點々々をして喜んでゐるではありませんか。

振り返ると、石崎平馬も、その娘のお禮も何時の間にやら逃げ出して、縁側には爺やの友吉が附添つて、お組は大したやつれもなく、初々しくもかしこまつてゐるのでした。林太郎と同じ寶物藏のこれは階下の唐櫃の中に入れられてゐたのを救ひ出して身を淨めさせ、身扮を改めてこゝへ呼出したのです。

「平次、それもこれも、その方のお蔭だ。この恩は忘れないぞ」

林太郎はゐざり寄つて平次の手を取りました。

「いえ、この手柄はあつしぢやあございませんよ。お組さんの合圖とそれを最初に見付けて、あつしを引張り出したあの八五郎の野郎の手柄で――」

平次に指されて、八五郎は首筋のあたりを掻き乍ら、無暗に恐れ入つてをります。

「親分、變な捕物だね」

歸る途々八五郎は考へ込んで許りゐる平次に話しかけました。

「捕物ぢやないよ。こいつは飛んだ千代萩さ、——だが、お家騷動はすることがネチネチして嫌だね」

「でも、あの娘はよかつたぜ、親分」

「お組のことか、——唐櫃から出した時は、手を合せて泣いてゐたぜ」

「苧と襷と髷をブラ下げて、『おたすけ』は嬉しかつたな」

「命がけの合圖だつたのさ。笑つちや氣の毒だ」

さう言ふ平次もカラカラとわけもなく笑ひたい衝動を感じてをりました。

# 青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物全集第二十四巻　吹矢の紅」同光社
　　1954（昭和29）年4月25日発行
初出：「オール讀物」文藝春秋社
　　1940（昭和15）年11月号
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
※題名「銭形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：門田裕志
2016年6月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 銭形平次捕物控
## 二階の娘

2026年10月1日　第二版

### 奥　付

発行　　青空文庫

著者　　野村胡堂
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/